

たまねぎのべと病に注意！

1 発生状況

3月上旬の巡回調査においては、べと病の発生は確認されていないが、今後、発病適温となるため降雨により発生拡大する恐れがある。特に毎年発生が見られるほ場においては注意が必要である。

2 生態と発生条件

- (1) 作物残さなどから、11～12月に苗床や定植後のほ場で感染する。
- (2) 感染した株は越冬し2～3月に病徴を示し、葉は萎縮黄化し、つやがなくねじ曲がり硬くなる(図1)。
- (3) 越冬罹病株が感染源となり、3～5月に気温が高く降水量が多いと2次感染株(通常のべと病株)の発生が増え、急速にまん延する。2次感染株は、葉に淡黄緑色で楕円形の病徴を呈する(図2)。
- (4) 気温6～19℃で分生胞子を形成する。最適気温は13～15℃。
- (5) 気温15℃前後、湿度90%以上で胞子が発芽する。
- (6) 胞子は通常100m、強風時はさらに広範囲に飛散する。



図1 越冬罹病株



図2 2次感染株

3 防除

- (1) 感染前に予防効果のある薬剤を散布することが重要である。発生を認めたら、発病株を抜き取った後、治療剤を散布する(下表)。
- (2) 抜き取った発病株は、次年度の感染源となるため、集めてほ場外に持ち出し処分する。

表 たまねぎ べと病の防除薬剤(例)

薬剤名	系統(FRAC)	種類	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
ジマンダイセン水和剤・ ペンコゼブ水和剤	ジチカバメト(M3)	予防	400～ 600倍	収穫3日前まで	5回以内
ベトファイター顆粒水和剤	その他(27) CAA(40)	治療 治療	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
リドミルゴールドMZ	ジチカバメト(M3) フェルアト(4)	予防 治療	500～ 1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ザンプロDMフロアブル	CAA(40) QoSI(45)	治療 予防	1,500～ 2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ホライズンドライフロアブル	その他(27) QoI(11)	治療	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内
プロポーズ顆粒水和剤	クロロニトリル(M5) CAA(40)	予防 治療	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内
メジャーフロアブル	QoI(11)	治療	2,000倍	収穫前日まで	3回以内

注) ジマンダイセン水和剤及びペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZなどに含まれる成分マンゼブの総使用回数は、5回以内。
ベトファイター顆粒水和剤及びプロポーズ顆粒水和剤などに含まれる成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は、3回以内。